

最近、アメリカ映画『OPPENHEIMER』(以下『オッペンハイマー』と記述)の日本公開を巡って、ネット上で様々な議論が巻き起こっている。

『オッペンハイマー』はその題が示す通り、原子爆弾の開発の中心人物であった理論物理学者・ロバート・オッペンハイマーを主人公とした映画だ。

最初に断っておくが、筆者は現時点でこの映画を観ていない。そのため、ここで述べる映画の内容は、あくまでも日本におけるインターネット上の意見・感想などから、推察したものに過ぎない。しかし、そのネット上の様々な反応そのものが「核」というテーマについての一考察のもとになると考えて、以下意見を述べたい。

そもそも『オッペンハイマー』はなぜ日本公開が危ぶまれているのか。一つの意見に、映画の内容以外のキャンペーン部分にある。『オッペンハイマー』は、アメリカにて『バービー』と同日公開となった。『バービー』は、その名の通りバービー人形の世界観を映画化したものだ。

同日公開ということで、二つの映画はタイアップしたプロモーションを行った。結果的に、明るくポップな『バービー』の世界観と原子爆弾のキノコ雲のイメージを掛け合わせたデザインのグッズが販売されることになった。

このようなイメージ戦略は、被爆国日本からすると到底受け入れがたい。そのため、ネット上では公開するべきか否かを巡り、本日まで様々な意見が噴出している状態になっている。

この話を聞くと、改めて核兵器に対する、日本と海外との落差を感じた。アメリカにおいて、核兵器というものが一つの「ネタ」として消費される傾向が強いという事実は、しっかりと記憶しておく必要があるだろう。

ではなぜ「核」というテーマは、ネタにされるのだろうか？

一つは、アメリカにおいて原爆投下肯定の言説が未だに根強いということがあるだろう。「原爆投下によって、戦争終結が早められ、多くのアメリカ兵(そして間接的には日本人)の命が助かったのだ」このような意見は、非常に多い。

この意見を少し検討してみよう。

まず第一に、日本が終戦を決断したのは原子爆弾投下よりもむしろソ連の参戦によるところが大きいという。原子爆弾投下は、あくまでも付随的な要素に過ぎないといわれている。

しかしここで、原爆投下肯定の言説は歴史的に誤ったものなのだ、と一概に断定するのは少し待っておきたい。

例えば、戦争終結を知らせる玉音放送のレコード盤を力尽くで奪い取り、あくまでも本土決戦を主張しようとした軍人たちの起こした「宮城事件」などを考えると、むしろ、日本はまだ戦争を継続していたかもしれないという可能性もあったのだ。勝ち目もないのに、ずるずると戦争を引き延ばし、いたずらに被害を拡大し続けてきた国・日本。そういうイメージは、内外問わずに広く流布している。その事実を考えれば、原爆投下肯定論者の意見も、無下には出来ない。

しかしそれでも筆者は、やはり原爆投下肯定論に賛成することは出来ない。それは、小学生時代に被爆者の語り部の方から聞いた被爆体験談が、到底言葉でいい表せないほどすさまじいものだった、という個人的経験も大きいのだが、なによりも、原爆投下肯定論が核抑止論にもつながるといえることがある。

核抑止論——互いに核兵器を保有し合い、国同士がそれを突きつけ合う。そうすれば、抑止力として、バランスがとれ、平和が保たれるという考えだ。

この考えには、トマス・ホッブズの「万人の万人に対する闘争」という世界観がベースにある。自然状態において、人間同士は互いを攻撃し合う、野蛮な状態である。だからこそ、契約などを通して、社会を形成していかなければならない。

しかし、そもそもこのホッブズ的認識には無理があると言わざるを得ない。災害時に一時的に法律や警察が機能しなくなった状態でも人々が助け合いをするというのは、レベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』などに詳しい。そしてなによりも、守るべき「法律」の概念がなくとも、人は平和な社会というものを形作り、維持できるのだということは、多くの文化人類学の知見が示している。

むしろ「法律」や「社会契約」といったもので形成される国家という存在が、核兵器を生み出した。人類史上、これ以上になく野蛮で、暴力的で、非人間的な武器である核兵器は、「万人の万人に対する闘争」を防ぐはずの国家なくして、誕生しなかつたのだ。

冒頭の話に戻ると、映画『オッペンハイマー』については、日本で公開すべきだと筆者は考える。ネタにされて不快だという気持ちは少なからずあるが、その不快な現実ごと直視して、核兵器に対する認識の差異について受け入れたい。それこそが、なぜ核兵器は生まれたのか、これからの時代に核とどう向き合うべきなのかを問いかけ、思考していく契機となるはずだからだ。核兵器を肯定する人々を、安易に「愚か」「異常者」などと断定せずに、どのような背景があるのか向き合っていく。それこそが核なき世界を実現するささやかな一歩ではないのだろうか。